

## はじめに

小杉放菴（未醒）は明治14年（1881）に栃木県日光で生まれた画家で、日本の近代美術界において洋画と日本画の狭間で独自の境地を切り開く一方、その初期においては文芸雑誌などの挿絵や漫画を通して文学界との接点も多く、国木田独歩や田山花袋らと親交を深めてきました。

特に、放菴は青年期に国木田独歩と係わりの深い近事画報社に入社して、日露戦争の記者として戦地から記事や写生画を通信する一方、独歩のもとで文芸雑誌の挿絵や装幀などを担当しました。さらに独歩は放菴の仲人をつとめ、公私にわたる独歩と放菴の係わりは独歩が没する明治41年（1908）まで続きました。

また、花袋も放菴と同じく従軍記者として戦地に赴き、独歩を通じて二人の親交も深まりました。特に、明治39年に花袋が中心となって創刊した雑誌「文章世界」には放菴ら多くの画家たちも挿絵などを描き、文芸活動に参加しました。さらに、花袋と放菴は「旅」を通じて心を通わせ、大正15年（1926）と翌昭和2年には2度にわたる九州旅行を伴にし、その時の紀行文と写生画が「耶馬溪紀行」「水郷日田」として共著で発表されています。

今回の特別展では、独歩や花袋との親交を通して放菴と文学界との接点を探るとともに、小杉放菴の様々な作品に触れることで文学と美術のおりなす世界をご理解いただこうとするものです。

なお、特別展開催にあたりご協力いただきました多くの皆様や諸機関に心より感謝申し上げます。

平成11年10月16日

館林市教育委員会

表紙

小杉未醒画「耶馬溪」花袋漢詩賛の一部



こすぎほうあん みせい  
小杉放菴 (未醒) 1881~1964

明治14年(1881)栃木県日光町に二荒山神社宮司の六男として生まれる。本名国太郎。明治29年(1896)旧制中学を1年で中退すると、日光在住の洋画家五百城文哉に入門し画家を志す。東京に憧れた国太郎は一度師に無断で上京するが、明治32年(1899)師の許しを得て再上京して田端に住み、小山正太郎の不同舎に入門、同35年には太平洋画会の会員となり画業に専念する。最初の上京の頃より画号を「未醒」とし、これは師の文哉から飲酒をたしなめられそれに反抗して付けたといわれている。

明治36年(1903)小山正太郎の紹介で矢野龍溪の主宰する近事画報社に入社し、翌37年には近事画報社から刊行されている雑誌「近事画報」に日露戦争の記事を掲載するため、特派員として朝鮮へと渡る。この時、「近事画報」の編集を担当していた国木田独歩と出会い、以後、独歩とは深く親交を持つようになる。従軍中に未醒はジャーナリストとして戦場の挿話や情景を画報通信し、その体験は帰国後に制作した戦争画や詩集『陣中詩編』として著されている。

帰国後は近事画報社の正社員となり、明治39年からは博文館から創刊された田山花袋の主宰する雑誌「文章世界」に挿絵やコマ絵などを描くようになり、この頃から様々な文芸・美術雑誌に携わり、風刺を利かせた漫画なども多く描くようになった。また、明治36年頃田岡嶺雲を通じて知り合った小川芋銭らとともに漫画展なども開催する。

一方、太平洋画会や文部省美術展覧会(文展)などに作品を出品し、特に文展に出品した「水郷」(明治44年)、「豆の秋」(同45年)では最高賞を受賞し、画家としての地位も確立するようになった。

大正2年(1913)渡欧し、ほぼ半年間にわたる旅行でヨーロッパの風景画などを制作する。帰国後、二科会や日本

美術院の創立に参加し、大正11年には梅原龍三郎や岸田劉生ら洋画家らと春陽会を設立する。しかし、ヨーロッパ旅行前後から、未醒は日本画も描くようになり、大正4年には横山大観や下村観山らと「東海道五十三次絵巻」を制作する。このように、大正期には中国や日本の空想的な人物や風景をテーマとした作品が多くなり、さらに、大正14年(1925)には東京大学安田講堂の壁画制作に取り組み、昭和に入ると水墨画にも親しむようになり、中心は日本画へと移っていった。

昭和2年(1927)には、田山花袋と一緒に旅した九州旅行をもとに共著「耶馬溪紀行」「水郷日田」などを出版、また芭蕉の足跡をたどる東北・北陸への旅に出て「奥の細道帖」などの作品も描いた。さらに、この頃から画号も「放庵」に改め、昭和初期の作品には墨の濃淡を生かした筆使いで、山岳や水辺を描いた独特な世界が生み出されるようになった。

昭和10年前後より、画号を「放菴」と署するようになり、鮮やかな色彩で花鳥画を描くとともに、やがて日本の神話や童話、歴史上の人物をテーマに越前麻紙に渴墨風に描く画法が中心となり、放菴ならではの独自の日本画の世界が完成した。

昭和20年(1945)戦災で田端の画室を焼失し、新潟県の妙高高原にある別荘「安明荘」に移り住む。以後、春陽会や墨心会などの展覧会に作品を出品し続けるが、昭和39年(1964)82歳で老衰のため没した。

画家として生涯を閉じた放菴であったが、その多彩な才能は近代文学界にも深く傾倒し、明治・大正期には独歩や花袋ら文学者のほかに芥川龍之介らとも交流を深めていった。また自らも紀行文や評論、随筆など多くの著書を残す他、『放庵歌集』(昭和8年)など多くの歌集もまとめ、画風と一体となった放菴文学がかもしだされたといえる。